

創建

明永暦7年(1653年)に当時台湾南部を占領したオランダ人によって建てられ、当初は「普羅民遮城(Provintiaプロヴィンティア城)」と呼ばれたこの城は、安平の「熱蘭遮城(Zeelandiaゼーランドディア城)」と相對してたずんでいました。熱蘭遮城はオランダ総督の統治の中樞、そして普羅民遮城は行政と商業の中心でした。

普羅民遮城の建物は四角型で3つの台座からなります。各台座の上に立つ洋風建物の城壁は、砂糖水、もち米のとぎ汁、カキの殻を灰にした物を混ぜた接合材を使い、赤レンガを積み上げて厚く堅牢に造られました。300年以上経った今も厚い壁とアーチなどが残っています。

300年以上の歴史を有する赤崁楼は現在、反り上がった赤瓦の軒、そびえ立つ楼閣の姿を見せています。時代の変遷にともない、あるときはオランダ時代の洋風の城、あるときは清朝の中国風楼閣、またあるときは日本統治時代の陸軍病院とされ、今は歴史博物館として静かにこの世の移り変わりの激しさを物語っています。

1983年、内政部より第一級古跡として指定されました。



赤崁楼(普羅民遮城)の歴史

- 1625 オランダ人が布十五束で原住民から赤崁地区の土地を買い取り、そこに商館、市街、倉庫、病院を設置して「普羅民遮(Provintia)」街と名付けた。
- 1653 オランダ人と漢人が衝突した「郭懷一事件」が発生。オランダ人が赤崁に城堡を建築して防御の拠点となり。商業と行政の中心として「普羅民遮城」と名付けられた。通称「紅毛城」または「番仔楼」、後に「赤崁楼」と呼ばれた。
- 1862 台湾中南部の大地震により、すでに損害していた赤崁楼のオランダ建築は全て倒壊した。
- 1875 沈葆楨が牡丹社事件の際に軍を率いて来台。航行の安全を祈って、赤崁楼遺跡に海神を祀る廟の建築を願い出たが、事情により未完成のままとなった。
- 1886 台湾の沈受謙知事が文化教育振興のため赤崁楼西側に「蓬壺書院」を建設。残っていた砦の土台に「文昌閣」と「五子祠」(宋代の儒学者である朱熹、程灝、程頤、張載、周敦頤を合祀)を建立。同時に海神廟も修復した。
- 1895 日本による統治が始まり。赤崁楼は「陸軍衛戍医院」に変更された。
- 1944日本人によるオランダ城堡遺跡の修築、大士殿の解体と海神廟、文昌閣、蓬壺書院ホール of 修繕が行われた。
- 1960 元大南門城内にあった御最眞碑座を赤崁楼台座南側に移転。
- 1965 赤崁楼を修築し、海神廟と文昌閣の主な木造を鉄筋コンクリートに改造された。柱や樑には木製を模造したものが使用され、文昌閣の赤崁街側の出入口は民族路に移された。

参観のご案内

入 場 料／大人:50元;子供:25元

参観時間／午前8時30分から午後9時30分まで

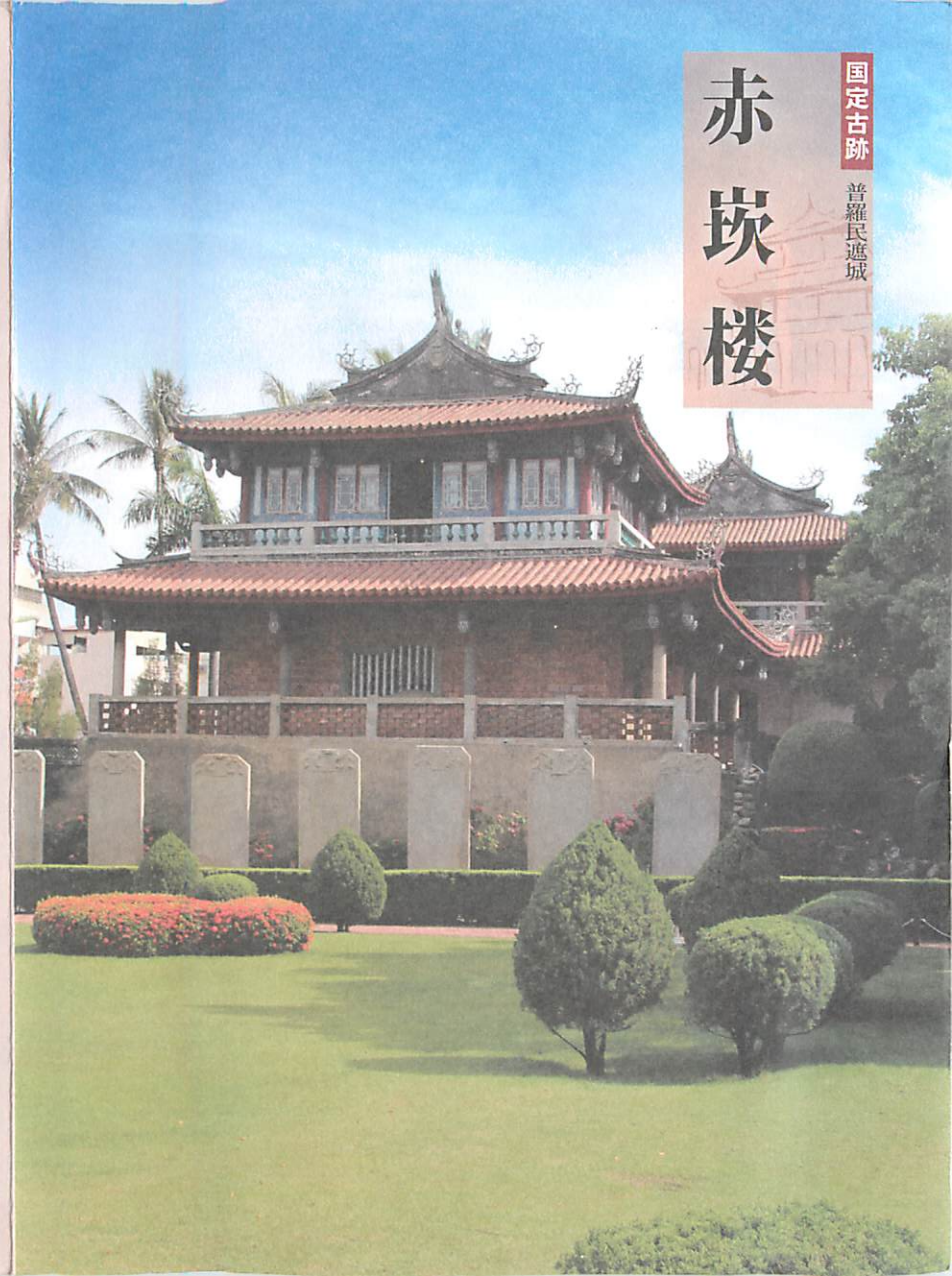
古跡お問い合わせ: (06) 390-1341・295-5703

赤崁楼お問い合わせ: (06) 220-5647 所在地:台南市中西区民族路二段212号

台南市政府文化局 広告

赤崁楼

国定古跡 普羅民遮城





普罗民遮城(プロヴィンシア城)遺跡:

オランダ人が赤崁台地に建設した普罗民遮城は、四角形の主塔と東北及び西南に面した場所にそれぞれ1か所ずつ建てられた稜堡で、防衛機能を持たせるために菱形の構造をしています。清朝の光緒年間に普罗民遮城が完全に破壊された後、東北側の稜堡の遺跡には五子祠が建てられましたが、その後台風によって祠は破壊されました。1944年、日本人が赤崁楼を改修し、城塞の遺跡も発掘されました。その際に凹みや穴、その周囲のまだらのレンガ造りの壁が発見されました。この貴重なオランダ時代の遺跡と石馬の後ろにある城塞入口の遺跡や積み重ねられたレンガ造りの壁の材質と壁の厚さからも普罗民遮城の堅固さがうかがえます。

赤崁楼主塔遺跡:

清朝時代の文昌閣は普罗民遮城(プロヴィンシア城)主塔の基礎の上に建てられています。今日まで300年以上にわたって屹立している城塞は、今日でも蓬壺書院から文昌閣に上がる石段から主塔の遺跡を見ることができます。オランダ時代のレンガには砂糖水、もち米汁、カキ殻の灰を調合したものが使われており、堅固な土台を築いています。



蓬壺書院:

清朝の光緒12年(1886年)、台湾の知県(県知事に相当)であった沈受謙が教育を振興するため、住民の土地を購入して呂祖廟にあった「引心書院」を赤崁の北端に移転して改修し「蓬壺書院」と改名しました。日本統治時代、地震の後に遺された典型的な閩南(福建省一帯)建築様式の門庁(応接間に相当)両脇にある赤レンガの壁にはそれぞれ緑釉の花模様の窓があり、「雲路(官職で出世する)」「鹏程(無限の将来性)」「立雪(師を敬い、誠実に学ぶ)」「霄窺(開けた未来)」という扁額が掲げられています。古色蒼然とした厳肅さの中、勤勉に苦学して科挙に参加する学生がいつの日か成功し、名声を得ることが暗喩されています。



普罗民遮城(プロヴィンシア城)正門:

明朝の永暦7年(1653年)に建設されました。オランダ人が赤崁台地に建設した商業と行政の中心は、百人の軍隊が駐留でき、防衛機能を持っていました。台江内海に隣接する城塞は、対岸にある熱蘭遮城(ゼーランジャ城)と相互に支援する形をとっていました。明朝の鄭時代、清朝、日本統治時代を経て、城塞の主体には海神廟、文昌閣などの伝統的中国様式の建物が増えてきましたが、主塔正門は1944年に発見されました。現在ではレンガの壁でふさがれていますが、かつての階段の跡が見え隠れしています。



瓶形の門:

海神廟後方の壁にあり「平穩無事」という意味があります。門の上の梁にはウサギと芭蕉の葉の図案があります。芭蕉の葉は五行思想で木に属するもので、東方を象徴しています。また、ウサギは月を表すもので「玉兔東昇(長寿と子孫繁栄)」を象徴する縁起のよい図案です。

瓶形の門



小碑林:

赤崁楼はかつて台南市歴史館として多くの石碑、文化財を収集しており、それらは建物西側の壁に多く陳列されています。足の折れた石馬は洲仔尾出身の清朝の武将である鄭其仁の墓前にあった石の彫刻です。現在石馬の脇に立っている「鄭公墓道碑」が鄭其仁です。文昌閣と海神廟の基台の城壁には20数個の石碑があり、南門碑林に次ぐ規模であるため、小碑林と呼ばれています。

文昌閣:

光緒12年(1886年)、台湾知県(県知事に相当)沈受謙によって教育振興のために建立されました。海神廟と同じく「歇山重簷頂」という建築様式の文昌閣は、海神廟と共に赤崁楼の優美なイメージを形作っています。1階は文化財陳列室、2階には魁星爺が祀られています。文昌府(神界で学問を扱う機関)の事務と人間界の学問と官位を司っていると伝えられる魁星爺は、かつて科挙の時代における試験の神であり、今日では試験合格を祈願する信仰の対象となっています。魁星は北斗七星を自然崇拜したもので、鬼の形相をして右手には辰砂の筆、左手には墨床を握り、右足で大亀の頭を踏みつけ、左足で星を蹴る姿をしています。これらは「一等賞を取る」「試験合格」を意味しています。



鄭成功和議の像:

明朝の永暦15年(1661年)4月に普罗民遮城(プロヴィンシア城)を包囲攻撃した鄭成功は、そこを守っていたオランダ人の投降後に承天府を設置し、台湾における開発事業を始めました。この歴史を記念するために民国69年(1980年)、台南市の赤崁ライオンスクラップ国際協会によって赤崁楼の庭園前に「鄭成功受降図」が建てられました。この像は後に「鄭成功和議の像」とされ、当初ひざまずいて投降していたオランダ人の像は立像に改められました。



御鼠肩牌:

清朝の乾隆51年(1786年)、台湾で「林爽文事件」が発生しました。朝廷は陝甘総督の福康安に混乱を収めるよう命じ、3か月後に事態は収束しました。乾隆帝は大いにこれを喜び、自ら筆を執って5篇の詩文を書き、満洲文と漢文で石碑を刻ませました。これが「御鼠肩牌」の由来です。石碑の額の上方には篆書体で「御製」と刻まれた額を啣えた龍の群れがあり、8匹の飛龍が左右両側を這いつたう荘厳な形を見せています。ここに彫られている龍には足の爪が5本ありますが、当時5本の爪を持つ龍は皇帝だけが使える龍の図案でした。このことからこの碑の貴重さが分かります。9基の石碑は、龍が産んだ9匹の子のうちの1匹で重いものを背負うことを好み、亀の形をしている鼠肩に背負われています。石碑の土台としてこの9基の鼠肩牌は赤崁楼の有名な景観となっています。



海神廟:

清朝の光緒元年(1875)、牡丹社事件によって台湾を防衛する命を受けた沈葆楨が海神の庇護に感謝するために建立しました。海神廟は普罗民遮城(プロヴィンシア城)南西の稜堡上に位置しています。廟の門の上の梁には黄杰による「赤崁楼」の扁額がありますが、文昌閣には沈受謙による「赤崁楼」という扁額があり、「嵌」と「崁」のどちらが正しいのか論争となりました。1階の鄭成功の絵の上にある扁額「東海流瀝」は鄭成功による五言詩「礼楽衣冠第、文章孔孟家、南山開寿域、東海釀流瀝(服装から人となりを判断し、生活の哲学は儒家に学び、南山のように長寿であり、最上の酒は東海で造られる)」です。2階にはかつての様々な様式の船の模型と台江地区の移り変わりを示した図が展示されています。

